

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Is there an option to go beyond racism? - Étienne Balibar and Immanuel wallerstein in conversation with Manuela Bojadžijev

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 悠介, 中山, 智香子, バリバール, エティエンヌ, ウォーラーステイン, イマニュエル, ボヤディエフ, マニユエラ, Balibar, Étienne, Wallerstein, Immanuel, Bojadžijev, Manuela メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2562

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



人種主義を乗り越えることはできるか

—エティエンヌ・バリバルとイマニュエル・ウォーラーステインの対話—¹

エティエンヌ・バリバル
イマニュエル・ウォーラーステイン
聞き手：マヌエラ・ボヤディエフ
訳・解題：太田悠介・中山智香子

1. 政治状況²

ボヤディエフ（以下、BJ）今回議論をしたい点が3点あります。第一に、『人種・国民・階級——曖昧なアイデンティティ』に関して一連のセミナーを組織した理由です。第二に、この共著を支える概念的なアイデアについてです。この著作は「人種(race)」、「国民(nation)」、「階級(class)」という3つの核心となる歴史的構築物の全体的な分析に基づいています。第三に、今日までのこの著作の受容についてであり、この著作が政治的にどのようなインパクトをもち、またそのことによって何が達成されたのかという点です。

さて、二人が1980年代にパリで共同で一連のセミナーを開催した動機は何だったのでしょうか。セミナーは手順や方法論に関してどの程度計画されたものであり、またどのようにして、3つの核心的カテゴリーをおもな焦点として用いることに決めたのでしょうか。またセミナーでの議論は

¹ 本研究は JSPS 科研費 20K12832 および 18H00619 の助成を受けている。

² 訳者が内容に応じて節をもうけ、小見出しと註を付けた。小見出しについては、対話を記録した以下の映像作品に準じた。Charles Heller and Lorenzo Pezzani, “Intersecting Optics. A Dialogue on “Race, Nation, Class” 30 years on.”

(<https://www.youtube.com/watch?v=EhPIDgHewAo>)。註については次の仏語版を参考にした。Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein, « Race, classe, nation : Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein en conversation avec Manuela Bojadžijev » dans *Race nation, classe: les identités ambiguës*, Paris, La Découverte, 2018, pp. 11-52.

どのような過程を経て本になり、いかにして二人による対話という形式が現れたのでしょうか。

ウォーラーステイン (以下、W) 二人が出会ったのは、1981年にニューデリーで開催された学会でした。親しくなって、ある日ランチのときに、このようなセミナーをやろうと決めたのです。当初は1年だけやるつもりで、人種主義とエスニシティがトピックでしたが、大きな成功を収めました。たくさんの人々が来て、関心を持ってくれました。それで2年目、3年目と続けたのですが、基本的にはその都度、誰かが事前に準備したペーパーについての議論から広げようという考え方でした。それはとてもうまくいきました。人々は伝統的であると思われる「階級」や「人種」などについてごく初めから問いを発し、その問いは時宜を得たものでした。しかしそうではあったものの、当初のアイディアでは各年のセミナーの成果として著作を出版するというものだったと思いますが、ペーパーの出来にはばらつきがあり、期日までにペーパーが出揃わないこともありました。それで私たちは、他の人々のペーパーについて考えるのはやめにして、自分たちのペーパーについて書くことにしたのです。ふたりともセミナーのためにペーパーを書きましたので。だからこの共著はエティエンヌと私のあいだで、「人種」、「国民」、「階級」の関係に関する知的問題について交わした議論をまとめたものです。そんな風な成り立ちであったと思っています。

バリバル (以下、B) 一連のテーマについて、私たちは少なくとも完全には事前に計画していなかったと付け加えておくのが大事だと思いますね。

BJ: これらの歴史的構築物を通して考えることが必要であった当時の政治状況をどのようにお考えでしょうか。

B: 私たちはまず「人種」から始めました。それはある意味で隠されたままであり、しかしもっとも見えやすい論点でした。当時はフランスに新しいファシズム政党が現れ、その後さらに拡大していきました。国民戦線が初めて重要な地方選挙で勝利したことは、私たちにとってきわめて懸念さ

れる現象でした³。さらにひどいことが起こるだろうと思いました。そして彼らはもちろん、当時も今も同じ政治的テーマを扱っていました。イスラムの問題は当時まだ中心的ではありませんでした。しかし、移民問題は中心的な論点であって、これはかつての被植民者によるいわゆる侵略とみなされたのであり、これはほんとうに嫌な表現だと思いますが、現在言われているところの逆植民地化とされるのです。

それは当時、すでにきわめて人種主義的な主張でした。フランスでは移民がずっと標的となり続けていました。それで私はイマニュエルに、私を悩ませているのは人種主義であり、というのも、それは政治的に懸念されるものであり意義があるからでもあるが、どこか理論的に不十分であり、この問題を効果的に論じることができないと私が感じていたからでもあると話しました。私は彼が私よりもはっきりした考えを持っているだろうと思ったのですが、それは、当時まだポスト・コロニアル問題とは呼ばれていなかった移民という論点が、イマニュエルの世界システム理解において中心的な機能を果たしていたからです。私が学んだのは、完全に伝統的なマルクス主義ではありませんでしたが、それでもやはり私を含めマルクス主義者はこの種の論点についてなんら言うべきことがなかったのです。私がイマニュエルに問いかけたのは、当時何を興味深く感じ、何に取り組みたいと感じているかということでした。そしてイマニュエル、君は「エスニシティ」と答えたこと記憶していますよ。私たちはある意味で、同じ時期に同じ関心をもっているとわかったので、これらの問いに異なる学問的背景から、そして異なる知的軌跡を通じてアプローチすることができたのです。これは幸福な偶然でした。

こうして第一のセミナーのアイデアが決まりました。セミナーはとても、とてもうまくいきました。たくさんの方が来てくれましたし、議論は大変興味深いものでした。当時フランスでは、私の知る限りでは、歴史家、人類学者、社会学者、哲学者などが集まって学際的な立場からこうした問いを議論できる場所がほかになかったのです。

イマニュエルの問題設定はこれを持ち込むのに格好の枠組です。それでその年の最後に私たちは互いに、次はどうしようかと問いかけました。私はぜひ続けたいが、同じ主題で続けるわけにはいかないと言いました。イマニュエルにはおそらく腹案があったと思われるのですが、「国民」に進

³ 1983年、パリ西郊の街ドゥルーの市議会選挙で国民戦線(2018年より国民連合に改称)は保守と共通の候補者リストを選定し、左派に勝利する。国民戦線の初めての成功として注目を集めた。

むべきだと言いました。それから三年目には「階級」で続けました。けれども、私の記憶では、当時はまだ、『人種・国民・階級』と呼ばれる著作を書くという計画はありませんでした。計画が思い浮かんだのは、後になってからのことでした。しかし、これらのテーマもしくは論点は、研究仲間たちからすべて同じ程度の関心を集めたわけではありませんでした。「人種」は大成功で、「国民」はまずまずの出来でした。信じられるかどうか分かりませんが、階級に関するセミナーが、もっとも成功しなかったのです。今日ではまったく異なると思いますが、社会システムとしての資本主義の問題、階級分化と対立としての資本主義の問題は、たしかに不平等と排除をめぐる議論を引き起こしました。しかし、資本主義の問題をめぐって今日ほどの激しい議論が交わされることはありませんでした。他の二つのセミナーより参加者は少なかったのですが、これらすべてが終わったときには材料が揃いました。

私たちをこの著作に向かわせたのは、私たち自身、お互い同士の会話のための間接的な道具のようにしてセミナーを活用したという事実があったからでした。私はイマニュエルの書いたものを読み、彼の話聞くことを通じて、自分とはまったく異なる仕方でも資本主義を論じたり理解したりする術を学び、大いに得るところがありました。しかし、かなり異なる背景から来た人々もおりました。私の友人で、残念ながら数年前に亡くなりましたが、フランソワーズ・デュルーというフランスのフェミニストの哲学者がいました。彼女は当時フランスのフェミニストたちのあいだで熱く議論されていた問題、すなわち「階級のカテゴリーをジェンダーに当てはめるべきかどうか」という問いについて、とても興味深く論争を喚起するようなペーパーを出しました。この問いは政治的に重大な結果をもたらすものでした。そして後に、これは私が悪いのですが、自分の書いたペーパーで彼女の考えを用いたのですが、彼女のペーパーは刊行されませんでした。それで彼女は憤慨しました。彼女は私に「ほら、またここでも、女がセミナーで話をして興味深いアイデアを出すと、セミナーを主催しているのは当然のように男で、自分に役立つと思うものを取り入れ、自分の手柄として出版するでしょう」と言いました。彼女の言う通りです。ほんとうにその通りなのです⁴。

⁴ フランソワーズ・ドゥルーのエッセー『女性階級は可能か?』(*Une classe de femme est-elle possible?*)を含むセックスとジェンダーの問題に関する論考を収めた著作は、ミレイユ・アザーを編者として、ヴァンセンヌ大学出版局から刊行予定。

W: そうですね、しかし階級についてはもうひとつ言っておくことがあります。第二次世界大戦後の1945年以降、誰もがマルクス主義者であった時代があったのを覚えているでしょう。多かれ少なかれということですが、とりわけフランスにおいて。

B: 左派のすべての人がということですね。

W: そう、左派のすべての人ですね。そしてそれから比較的突然に人々が舵を切ったように、「いやいや、それは古臭いですよ」と言って、「階級」という概念を議論から退けたのです。したがって、この著作を出すことは、とりわけフランスで、しかしフランスだけではなくイタリアやドイツでも消えてしまった「階級」の議論を復権させる試みだったのです。

2. 交差する視線

BJ: ある意味でこの著作は、私たちが耳にする今日の多くの議論よりも複雑です。1980年代に国際的なスケール、ほとんどグローバルなスケールで学際的かつ統合的なパースペクティブからずっと無視されていたこれらの複雑なカテゴリーを導入することは、マルクス主義に息を吹き込み、再生させることにほぼ等しかったのです。おもなカテゴリーをひとつひとつ考察してゆくと、相矛盾する不安定な条件が浮き彫りになり、それぞれが限界をもっていることや互いに依存し合っていることが明らかになりました。これは今日においてもまったく適切なアプローチです。(と同時に、この著作を読み直し、私たちの時代のためにあらためて編集し直すことが求められることとなります)。お二人の統合的なアプローチという考え方について、説明していただけますか。

W: そうですね、私たちはある意味で、どこか単純すぎると思うに至った従来の分析から、3つのカテゴリーのすべての議論をやり直そうとしました。これらの領域は、もっと有用な理論や政治の議論のために再活用を試みられるように開かれていました。私たちがやりたかったのは、「人種」や「国民」や「階級」を議論するように仕向け、その3つがどのように接合できるかを話し合うように仕向けることだけでした。議論は今でも継続しています。この著作が刊行されたときよりも、さらに熱を帯びながら続いています。

この著作の大きなメッセージは、「人種」、「国民」、「階級」が切り離さ

れて分析されてはならないということで、これが第一のメッセージです。そしてまた、それらが同じ現象をみる 3 つの異なった眼鏡であるということです。どれかひとつのアングルだけで分析すると、的を外してしまいます。つまりすべての論点は、「人種」、「国民」、「階級」の関係とは何かという問いにつながり、その答えは、互いに80%程度は重なるものだという事です。あなたが自分のアイデンティティを特定したり、あるいは分析のため他者を認識したりする際に、もし人種主義の用語を用いるなら——これを人種主義差別主義者の用語と言うべきではないでしょう——、あるいはまた階級の用語を用いるのなら、いずれの場合でも同じ絵を見ているようでいて、まったく同じではないのです。あなたがどの眼鏡を用いたいと考えるかによって、理論的そして政治的な分析にたいして大きな違いをもたらすのです。したがって、もし私が労働者階級——これは古いマルクス主義的カテゴリーであり、おそらくはプロレタリアートと言われるのでしょが——と言うときには、伝統的な定義でプロレタリアートに属する人々とは、支配階級出身の白人ではなく、抑圧された黒人や有色人種であるのです。それで、彼らを別個に扱くと、プロレタリアートの 80% は「人種」、「国民」、「階級」のいずれのカテゴリーにおいても、実際には下位集団に入るという点が見逃されてしまうのです。そういうわけで、第一に彼らはまったく同じようできて完全に同じというわけではありません。次にどの扉を選ぶのを決めなければなりません。そして、問題をどのように考え、またどのようにそれにたいして行動するのは、ひとつの扉を開くと決めることそれ自体によって、多大な影響を受けます——そしてこれはたった一度で永遠に決まってしまうものではありません。ですから、現時点で有用な「階級」や「国民」のカテゴリーも明日には機能しないかもしれません。それはたえず変化するからです。

BJ: しかし同時に、それらのカテゴリーは「同じ」ではないですよ。共著の副題が示している通り、いずれも曖昧ですが、異なった方法で、また異なった目的のために問題化されているのではないのでしょうか。

B: 「人種」、「国民」、「階級」という 3 つのカテゴリーが重複しているということ、またこれらを厳密に区別することのできる機械のように捉える理解を乗り越え、相互関係を研究する必要があるということ、これは多かれ少なかれ、今日人々が語の広い意味でインター・セクショナル理論と呼ぶものです。しかしそれで私は少し違うことを思い出しました。私たちが

タイトルや副題について議論していたとき——ここでは初版はフランス語で刊行されたということに注意して欲しいのですが、というのも、英語版はその後すぐにできましたが、初めはフランス語版でした——イマニュエルはある提案をしました。記憶違いであったらイマニュエルに訂正して欲しいですが、イマニュエルは、副題を両義的なアイデンティティ (Ambivalent Identities) にしようと提案したのですが、私は「両義的な」という単語があまり好きでないといい、実際それは正確に言えば私が考えていたものとは同じでなく、それで曖昧なアイデンティティ (Ambiguous Identity) という副題を提案したのです。

事実、私はこの二つが無関係ではないと考えています。もしあなたが各アイデンティティは両義的なものだと言主張するなら、「階級的アイデンティティ」、「国民的アイデンティティ」、「人種的アイデンティティ」を考えており、つまるところ読者に示唆しているのは、その効果がとても異なった方向に行くということですね。ナショナリズムはもちろん国民に関わるものです。ナショナリズムは単なるスティグマではありません。ナショナリズムはいかなる政治的運動や社会的運動であれ、有機的イデオロギーであり、国民は制度によって作られ、守られるものです。したがって、もし反帝国主義的解放闘争をみるならば、それは私たち二人の知的、政治的意識にとって、明らかに本質的な要素でした。イマニュエルはアフリカやその他、第三世界の解放闘争となるいくつかの場所に直接関わっていましたし、私はアルジェリア独立戦争の時代の学生でした。したがってここには、ただ進歩的であるのみならず、それなしではいかなる自由も解放もありえないという、ナショナリズムの事例があります。しかし反面、英語でジンゴイズムと呼ばれるもの、たとえばフランスやアメリカなどの帝国主義的な国民において現れる、あらゆる形態の排外主義的なナショナリズムがあります。上記のナショナリズムと真逆の方向に進む、もっとも見えやすい側面です。同じことが「人種」についても、ある程度言えるのではないのでしょうか。「階級」についてもそうではないのでしょうか。おそらくそうでしょう。イマニュエルはある種の階級意識の事例を中心に置きましたが、それは事実、人種主義やセクシズムの次元を含んでいました。つまり一方で、3つのアイデンティティはどれも資本主義、世界システム、帝国主義、ヨーロッパ中心主義といったこれらの客観的構造に根ざしていながら、他方では3つのアイデンティティは主体的に生み出されたものなのです。それらはすべて、広い歴史的な観点から両義的であり、伝統的なマルクス主義はそれを理解するのがきわめて困難だったのです。

しかし、少なくとも私の観点からすると——この点についてはやがて二人で同意したのですが——「曖昧さ」はまた、インター・セクショナルな方法のために必要なカテゴリーでもありました。具体的な集合的アイデンティティをみるなら、そして政治的あるいは社会的な運動を考慮に入れるならば、政治や社会においてはたらく力は、階級的アイデンティティ、国民的アイデンティティ、人種的アイデンティティ、エスニックなアイデンティティといったいずれかひとつのアイデンティティだけでは還元されないのです。もちろんこのことは私たちにとって基本的なことのひとつであり、それはいわゆる新しい人種主義の言説の文化的次元でした。純粹な何かというものでは決してありません。つねにどこか曖昧なのです。純粹な何かがあるという観点からものごとを見てしまうと、いくつかに劇的に欠落してしまうことがあります、だから私はインター・セクショナルという用語をわざわざ使うのですが、少なくとも本のタイトルのなかで欠落してしまうことがらがあります。目につきやすいものとして、もっともはっきりしているのがジェンダーです。

それも同じぐらい決定的なアイデンティティです。その客観的な土台はおそらく資本主義や家長長制よりもさらに古く、もちろん決定的な主観的次元やさまざまな帰結を伴っています。共著のなかでこの点を考慮しているのはイマニュエル一人だけで、私は考慮していませんでした。私が述べたのは、まずブルジョワ国家やブルジョワ社会は家族に社会構造としての機能を与えるという点であり、そしてこうした近代のブルジョワ国家では、家族が果たすこのような役割が人種主義的な体系や系譜的や体系と密接に結びつくという点でした。これは私にとっては、いまでも重要だと思われる点です。とにかくこのような点を参照しながら、私はジェンダーや性差について部分的には考慮していたのですが、あくまで間接的に考慮していただけでした。しかしイマニュエルは共著のなかで、資本主義的世界システムの労働者人口や労働力のあいだにヒエラルキーと階層を作り出す機能をもつ2つの大いなる人類学的構造があり、それは「人種」と「ジェンダー」であるとはっきりと述べています。彼は2つのあいだに非常に強力な並列、もしくは類似をみていたのです。

BJ: そうですね、この点に関しては家計世帯 (households) という用語を導入するのが、とても助けになるかと思います。インター・セクショナルな事象に関する論争のなかで見失われるのは、一方にある家計世帯と、他方の特に相続と資産が血統を通じて伝えられるということが相互に結び

ついているという点です。

B: 私たちは同じ概念的枠組を用いているわけではないのです。しかし、まあ、私たちがそれを鍵となる対象のひとつとしていなかったという事実は残るわけで、議論にはさまざまなフェミニストを含めなければなりませんでしたので、おそらくそのことで私たちは居心地の悪い立場に置かれたのです。もちろん何人かのフェミニストが来てくれましたし、そのうちの一人の名前、コレット・ギヨマンを挙げたいと思います。私は彼女の人種主義イデオロギーに関する仕事に多くを負っているのですが、彼女が非常に強力なフェミニストだった——このように過去形で言うのは、彼女が最近亡くなったからです——ことはきわめて重要です。彼女はさまざまな社会的差異のある種自然なもののみならず、あるいはジェンダー、人種アイデンティティやその性質を本質的なもののみならずする態度について、よく理解していました。そして、それはあくまで彼女独自の知的、理論的プロジェクトのほんの一部を成すにすぎなかったのですが、少なくとも私にとっては大変重要でした。私たちは「国民」、「階級」あるいは「人種」についてすら、互いに矛盾する見解をもっておりましたが、それでもなんとか対処することはできました。ところが残念ながら、ジェンダーやセクシュアリティに関する見解が矛盾していたために、これらについてはうまく扱うことができませんでした。

BJ: そのことをお話しくださってよかったです。あなたがアルチュセールに関してすでに示唆してくださった用語、「重層決定」⁵に焦点を当てたいのです。あなたはこれら3つの歴史的カテゴリーを検討することで、すでに多少なりとも重層決定について考えていたように思われるのですが。

B: イマニュエルは重層決定を実践していると思うけれど、重層決定の概念自体はそれほど必要としていないだろうね。(笑)

W: 彼〔エティエンヌ〕は哲学者だから——。

B: イマニュエル、それは哲学じゃなくて、理論というだけのことだよ。

⁵ バリバールの高等師範学校の師ルイ・アルチュセールが精神分析に着想を得て提示した概念。上部構造が経済的な下部構造の反映であるという経済決定論を退けるために、アルチュセールは社会全体がさまざまな審級によって重層的に決定されているとした。

W: 知的形成の違いの問題だね。私たちはみな、現実をたいして、何らかの方法で学問的に形成されています。もしあなたが哲学と呼ばれる課程を修めるとしたら、他の課程を修めた場合には読まなかったであろう何かを読むことになるのです。

B: たしかにそうだけれど、できる限り多くのものを読んではいったのですが、それでもやはりアルチュセールをめぐる私たちの理解や哲学の理解には、いつも必要な経験的基盤や土台が欠けていたのです。それでいつも同時に、強く社会科学を志向してもいました。とはいえ、私がアルチュセールから重層決定や、ときには過小決定という抽象的カテゴリーを受け継いだことはたしかであり、アルチュセールがこれらの概念を作ったのは、本質的には、政治状況について、また革命的な状況下でのさまざまな要素の結びつきについて何かを述べるためでした。革命が成功したり失敗したりするときには、単に資本主義の法則が必然的な結果を決定するからではなく、その都度異なる社会的、イデオロギー的要素が危機の時期と呼ばれるもののなかに結実するからなのです。

私がイマヌエルの仕事にひかれたのは、彼がマルクス主義的背景をもつ社会科学者のグループのなかにいたからでした。彼はブローデルやそれ以外の論者を通じて、資本主義は単に内的傾向を伴う生産様式であるだけでなく、グローバルな世界システムであり、それは植民地化を中心とし、またひとつの同じシステムであるにもかかわらず、その内部では異なるタイプの経済や社会が反目し、互いに異なっているという見方を援用して、紹介していました。それで、資本主義の世界システムの歴史に関するイマヌエルの大著の第1巻⁶を読み終わった後、私はこれこそ、重層決定などの抽象的カテゴリーを生産的かつ意義深い仕方で適用できる枠組だという仮説に思い至ったのです。

3. 人種差別主義者のいない人種主義

BJ: 全体的な分析について少し話が出たので、これらの用語のはっきりした定義や規定について、何かお話しいただけますでしょうか。あなたたち

⁶ Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System, vol. I: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, New York/London: Academic Press, 1974. [川北稔訳『近代世界システムI——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』、名古屋大学出版会、2013年]

は1980年代にこの議論が出た際、これらの用語の危機があったと示唆していたように思われます。「人種」や「人種主義」などの用語は変化しつつありました。今日に照らして歴史的に状況を考えた場合、人種主義の考え方は変化したのでしょうか。そして、もし変化したとすれば、どのように変化したのでしょうか。

W：そうですね、言葉の表現のうでで混乱があるのです。ちょうど今日、私は『ニューヨーク・タイムズ』紙かウェブ上かどこかで、われらの敬愛するトランプ米合衆国大統領が、多くの非難をかわそうとしてですが、「私は人種差別主義者ではない」と言ったと読んだのです。つまり彼は、誰かを人種差別主義者と呼ぶことは侮蔑であると思っているようであり、自分がそうではないと否定しているのです。それは反人種主義に理論的にある種の服従をしていることになります。人々がこのように振る舞うことに注目するなら、これは一方でよいことであるといえるでしょう。というのは、彼は「私は人種差別主義者ではない」と言わなければならないのであり、50年前だったらそんな必要を感じなかったに違いないからです。しかし他方で、それはナンセンスであり、というのも彼は明らかにもっともたちの悪い人種差別主義者であり、また恥知らずの人種差別主義者であるからです。それにもかかわらずそうではないと言わなければならないのです。つまり長期的な観点からみれば、トランプのような人でさえ自分が人種差別主義者であることを否定せざるをえないとすれば、反人種主義は何事かを成し遂げたといえるでしょう。

それで、まさに「人種」という用語の使い方について、あるいは「国民」という用語の使い方について話したいのですけれど、たいてい誰もが「国民」のカテゴリーを用いるのですが、とりわけトランプはこのカテゴリーを用いて、「アメリカを再び偉大にする」と述べています。彼は国連に出かけて行ってスピーチをしたのですが、そこで彼は「私はアメリカを再び偉大にするためにあり、私たちの国を守るためにある。あなたたち、そこにいるあなたたち誰もが同じことをしているだろう」と述べたのです。彼はある意味で正しいと言えます。当面、誰もが、たとえレトリックとしては反保護主義者であっても、きわめて保護主義的にふるまう理由がたくさんあります。よい例がカナダです。カナダは公式見解としては反保護主義的レトリックを掲げている国で、WTOのような機関にたいして、アメリカがカナダ産の木材輸入を止めていると不満を訴えています。しかし、実際には、アメリカからの輸入品を制限すると脅しをかけてもいます。つま

りカナダは自国の経済領域に他国が侵入してくるのを妨げる権利を弁護しようとするのです。

B : きみの本題に戻るなら、少なくとも私の観点からすると、「人種」と「国民」が対称的な関係にあるようには思われません。きみの観点からすれば、一方に「人種」があり、他方に「国民」と「階級」があるのであって、これらは別の問題だということになるのでしょうか。私が「人種」と「国民」は対称関係にはないと言うやいなや、「人種」は大変にかたちを変えやすく、しなやかなカテゴリーであるという、きみからの反論がすぐに心に浮かびます。もし制度、表象、意味論、疑似科学的な言説などを含むような歴史的な観点からものごとを見ようとするなら、「人種」はもちろんその意味を定めることのできるカテゴリーではないということが分かるでしょう。当然ながらこの点は、イマニュエルの観点からすれば、資本主義世界システムがまず植民地主義のうえに築かれ、さらにはポスト植民地主義のうえに築かれた以上、それが民族的な出自をもとにした住民のきわめて強力なヒエラルキー化とカテゴリー化を伴っているという点と結びつけられるでしょう。また、そうしたヒエラルキー化とカテゴリー化は、目に見えたり目に見えなかったりするあらゆる類いの特徴を含んでいるでしょう。

しかし、このことは「人種」のカテゴリーがいつも同じことを意味するというわけではありません。私はこの問題に継続して取り組み、また他の研究者たちと共同で研究してきました。そのため私は、私たち誰もが公式の言説における「人種」を用いているという事実——そして大半の反人種主義の言説でもこのことが当てはまるという事実——をある程度まで自覚するようになりました。そして、この公式の言説は第二次大戦後という比較的最近になってから一般に知られるようになりました。国際連合が創設されて、世界人権宣言が起草され、そしてよく知られているように、ユネスコが2つの宣言を続けて発表した時代です⁷。それは奇妙な歴史であり、というのも、「人種」と「人種主義」についての宣言がユネスコの庇

⁷ ユネスコが発表した「人種についての宣言」(1950)と「人種と人種的差異についての宣言」(1951)を指す。いずれも以下の仏語版、英語版の冊子に収録されている。*Le racisme devant la science*, UNESCO/Gallimard, Paris, 1960; *Four Statements on the Race Question*, UNESCO, Paris, 1969. バリバルによるこれらの宣言についてのより詳細な分析については、以下を参照。Étienne Balibar, « La construction du racisme », *Actuel Marx*, n° 38, 2005, pp. 11-28. [佐藤嘉幸訳「レイシズムの構築」、鶴飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス・スズキ・李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』、以文社、2012年、265-296頁]

護のもとで、したがって国連の庇護のもとで、社会科学と生物学の学者の一団によって作られたからです。そうして、彼らは最初の宣言を1950年に公表し、その後すぐに第二の宣言を1951年に公表したのですが、第二の宣言は第一の宣言を公式に取り消したわけではなかったものの、実はきわめて決定的な修正を加えました。どうしてそうしたのでしょうか。最初の宣言は主として人類学者(よく知られているようにレヴィ＝ストロースが含まれていました)や、あるいはまたメキシコ人やアメリカ人によって起草されたからです。第二の宣言は「人種」が生物学的なカテゴリーではなく、生物学上の神話であると断言した生物学者たちからの反論でした。しかし、人種がまったくの神話であるというのは正しくありません。というのも、社会的ダーウィニズムが表現するような単純な仕方では生物学的な差異は記述されるべきではないとしても、そうした問題となるような差異は存在します。私が言おうとしているのは、カテゴリー化のことです。あなたがアメリカ合衆国において仕事を探すとき、しばしば書類への記入を求められます。アメリカは平等と反差別政策に表向きは賛成しているにもかかわらず、あなたは白人か、アフリカ系アメリカ人か、あるいはヒスパニック系かというチェック欄を埋めなければなりません。これらは何なのでしょう。彼らはあなたをいずれかの部類に分けようとするわけですが、これらは3つの差別のかたちでした。しかし、このような差別はいずれも疑似生物学的なカテゴリーに依拠しているのであって、こうした疑似科学的なカテゴリーは、反ユダヤ主義ではナチスによるユダヤ人やそれ以外の集団の絶滅というショアーへと至りました。また、このカテゴリーはアメリカの有色人種の差別にも見出され、それは奴隷制の遺産である黒人の人種的な差異、あるいは当時の呼称によれば、ニグロの人種的な差異でした。そして、フランスやイギリスの植民地におけるあらゆる種類の人種的なヒエラルキーと差別もありました⁸。

してみると、〔ユネスコの2つの宣言が出された〕この時期は、「人種」のカテゴリーが明らかに安定した時期なのです。こうした階層化がスペインの植民地やそれ以外の場所で現れたかつての時代に戻るなら、「人種」の語でさえも同じことを意味していませんでした。たとえば、貴族という人種に適用されていたのです。そして、現代に至ると、一部の学者——私も多かれ少なかれこの流れに貢献したのですが——から「人種なき人種主

⁸ 『アクチュエル・マルクス』誌の特集を参照。「Le racisme après les races」, *Actuel Marx*, n° 38, PUF, 2005.

義」と呼ばれるような何かが次第に姿を現しつつあるのを目にすることになりました。それが意味するのは、差別が完全に同じ基準にはもはや根拠をもっていないということであり、それにもかかわらず差別があるということです。私たちが住むグローバル化した世界では、多くの社会構造が変化しているのですが、「人種」は消えつつあるわけではないのであり、というのもまさしく、きわめて多様な人々が共存しているからです。人々の混在はおそらくさらに進むでしょうし、その結果としてとりわけ異なる種類の労働者たちのあいだで対立を生むことになるでしょう。

そういうわけで、「国民」と「階級」については、イマニュエルの友人や同僚たちが反システム運動⁹と呼ぶものを説明しようとしたとき、イマニュエルが社会主義とナショナリズム、つまり階級に基礎を置いた運動と国民に基礎を置いた運動をおおよそ同じカテゴリーに含めようとしたという事実には、私はショックを受けたというわけではないにしても、困惑させられました。しかし、彼はそのすぐあとで、世界のさまざまな地域では階級に基礎を置いた運動と国民に基礎を置いた運動が同じように結びつくわけではないと主張し、北半球では社会主義が反システム運動としてより重要であるのにたいし、南半球ではもちろんナショナリズムは唯一の反システム運動ではないにしても、より重要であると主張しました。私にとってこれは気がかりなことで、というのも、私は「階級」と「国民」を社会構造として同じカテゴリーに入れたくないからであり、そして今や私はますます超ウォーラーステイン的、あるいはポスト・ウォーラーステイン的になりつつあり、それはアルチュセールや古典的なマルクス主義との断絶でもあります。

W: 古典的なマルクス主義にとって国民の概念は大きな悩みの種でした。

B: まさにその通りで、だから彼らはつねに「国民」を上部構造とみなし、「階級」をより根本的な構造とみなそうとしました。それゆえイマニュエルは次の点で正しいのです。「国民」も「階級」も制度的な次元を備えており、それらは資本主義世界システムの一部なのですが、ある意味では互いに対立し、けっしてなめらかに結びつくわけではないにしても、いずれもが同じくらい重要なのです。

⁹ Giovanni Arrighi, Terence K. Hopkins et I. Wallerstein, *Anti-Systemic Movements*, Verso, Londres, 2012(1989). 『反システム運動』太田仁樹訳、大村書店、1998年]

BJ：あなたはそれが今日の状況であるとおっしゃるのでしょうか。

B：その点では私たちは異なる意見をもっているかもしれません。私たちの最後の共同作業では、イマニュエルは資本主義世界システムが全体的な危機にあり、それはあらゆる政治的な戦略にたいしても影響を及ぼすと説明しました。私は資本主義が全体的な危機にあるとは思いませんでした。私は資本主義が変化の時期にあるのだと考えました。イマニュエルはこれが言葉のうえだけでの区別にすぎないと応じるかもしれません。しかし、私にとってこの言葉がもつひとつの意味とは「国民」と「階級」は消えつつあるというわけではなく、資本主義のシステムのなかで次第に異なる役割をもちつつあるということです¹⁰。

BJ：歴史家であると同時に社会学者として、あなた〔ウォーラーステイン〕は人種主義の問題について対話形式の著書を執筆されました。ドイツには特殊な歴史があるために、「人種」という語は用いられません¹¹——そしてそのことは理論的に看過できないことなのです。それはタブーなのです。『人種・国民・階級』のドイツ語版だけは『人種・階級・国民』の順に並べており、『人種・国民・階級』ではありません。1980年代の当時でさえも、「人種」、「国民」がまずあり、そしてその後に「階級」が続くという語の並び方は問題があると考え、「階級」を真ん中に入れることで、「人種」と「国民」を切り離そうとしたのでした。

4. 人種の対立、階級の対立

W：「人種」という概念はまさにヒエラルキーの現実と必ず結びつきます。もしヒエラルキーがあるなら——一部の人がより優遇されていて、特権、富、あらゆるものをより多く持っているとき——、そのときあなたはその

¹⁰ 以下を参照。I. Wallerstein, *La Gauche globale : hier, aujourd'hui, demain*, Maison des sciences de l'homme, Paris, 2017. 同書にはウォーラーステインの講演、エチエンヌ・バリバル、パブロ・ゴンザレス・カザノバ、ジェームズ・ケネス・ガルブレイス、ヨハン・ガルトゥング、ニールファ・ゴーレ、ミシェル・ヴィヴィオルカのコメント、そしてヴィヴィオルカによる序文が収められている。

¹¹ ボヤディエフによれば、戦後ドイツでは人種主義の語は一般にナチズムと結びつけられてきたために、これ以外の人種主義を指す語として用いられることがなかったという。Manuela Bojadžijev and Katrin Klingan, *Balibar/Wallerstein's Race, Nation, Class. Rereading a Dialogue for Our Times*, Argument Verlag/Haus der Kulturen der Welt, Hambourg, 2018, pp. 269-270.

理由を知ろうと思ひ、そしてヒエラルキーを正当化する何らかの説明を見つけたとしましょう。そうするまさにその瞬間に、あなたは人種差別主義者なのです。説明のためにさまざまな用語を用いるだけにすぎず、しかしだからこそヒエラルキーは消えることはありません。ヒエラルキー化されたシステムのなかにいるかぎり、人種主義的なシステムのなかになることになってしまいます。人種主義は一部の人々が住居、教育、収入、そしてそれ以外のことといった様々な点——つまり社会的な尊敬のことですが——で、他の人々より恵まれた生活水準を手に入れていることを正当化する単なる口実です。一部の人々は他の人々よりうまくやっており、そして何ごとかによってそのことの正しさが説明されるようになって、あなたは何らかの正当な証拠を持ち出し、彼らがうまくやっているのは当然なのだから、これはなるべくしてなったのである、等々。そしてあなたは今や人種差別主義者の術語のうちにあるのです。

BJ: ええ、その通りです。しかし、それでは問題は別の問題へとずれてしまいます。人種主義によるヒエラルキーの説明が固定化し、そうして別の問題へと移っています——つまり資本主義による搾取と貧困の問題です。あなたたちの共著のなかで大変に入り組んでいるのは、この本が人種差別主義者の術語を扱い、そのある種の豊かさを認める一方で、私たちがなぜ人種主義が存在するのかと考える際に、その原因を説明しようとする人種差別主義者の知識の所産には依拠することも、あるいは頼ることもないという点です。

B: それはずいぶんと込み入っているね。

BJ: あるいは言い方を変えれば、あなたたちの人種主義にたいするアプローチ、つまり人種主義を「一般化した反ユダヤ主義」として捉えるアプローチは、かつてアドルノが述べた「反ユダヤ主義はユダヤ人についてのゴシップである」という仮説から始まる批判理論の洞察を取り上げ直し、先に進めました。その結果、私たちはユダヤ人の存在によっては反ユダヤ主義を説明することができなくなりますが、それとは反対にいかにして「ユダヤ人」が反ユダヤ主義の分類学によって発明され、再生産されるのかを説明することができるようになるのでしょうか。そしてこうした分類学は一連の人種化された実体に依拠するばかりではなく、むしろ分類学はジェンダー関係や「国民」の歴史的な形態といった別の歴史的な構築物、さらに

は資本蓄積と階級闘争の性質によって重層決定されており、それゆえ分類学こそがこの重層決定のあり方によって左右されるのです。これらの要素それぞれはそれ以外の要素を表す媒体となるのであり、その結果として「人種なき人種主義」の正確な理解に到達することが可能となります。それゆえ、人種主義は現代においても独特の形態をとるのであり、というのもその現代が世界中の数多くの偶然的な要素——ナショナリズム、習慣、実践、そして反人種主義の言説、搾取の様式など——によって特徴づけられているからです。

このような人種主義の独特の形態からは2つの問題が生じます。まず、もし人種主義という用語に実際に一貫性があるのなら、あるいはそうあるべきなら、私たちは人種主義が多様なかたちをもち、変化に富むというダイナミクスをどのように理解すべきでしょうか。また、人種主義が歴史的には偶然の産物であり、移ろいやすく、さまざまな場所に現れるものであるということをいかに理解すべきでしょうか。次に、人種主義を理解するために重層決定を手続き上あるいは方法論的な基礎として選ぶならば、私たちにはいかなる出口も見えなくなり、相互的な決定と相互的な形成の終わりのない循環に陥ってしまうかもしれません。私たちはこうした状況に直面して、古ぼけた概念の倉庫へと立ち戻らなければならないのでしょうか。そして「決定」だろうか、あるいは「矛盾」だろうか、などと問わなければならないのでしょうか。あるいは主要な矛盾を決定することが問題なののでしょうか。あるいは挑発的な言い方をするならば、「階級」は人種主義とナショナリズムの外的な決定要因なののでしょうか。あるいは私たちが実際に指導的な役割を果たすカテゴリーとして、「人種」、「国民」、「階級」、さらにジェンダー関係というこれらの歴史的な概念をもつだけであるのなら、階級は歴史的に偶然の産物なののでしょうか。

B: それこそ私が取り上げたかったことです。イマニュエルの発言に立ち戻りましょう。しかし、私はイマニュエルが反ユダヤ主義を無視しているとのほめかそうというわけではありません。イマニュエルの発言はちょうどユネスコの宣言に含まれる2つの人種主義の古典的な形態におおよそ直接に関係しています。ひとつは「従属した人種」という植民地での差別であり、もうひとつはもちろんアパルトヘイトであり、またアメリカの奴隷制の遺産である有色人種の差別ですが、イマニュエルの発言は反ユダヤ主義のケースにはそのままでは当てはまりません。反ユダヤ主義のケースで

は、きみはこの点を考慮していないようで、あるいは少なくともはっきりと目に見えるかたちでは考慮していません。きみはほぼ逆のケースについて考えています。実際にはユダヤ人は人種的に劣った地位に置かれるわけではありません。彼らは他の人々よりも金儲けのプロとなる才能を備えた人々として、内部の敵とみなされるとというのが実情です。だから、心理学的な観点から言えば、彼らはむしろ同じ地位にある脅威とみなされます。

W: それはトランプの主張と少しも変わりません。それこそが、現実に社会の底辺層にあり、それに不満を抱く人々の境遇なのであり、彼らは自分たちを苦しめる人々を「知識人」のような何らかのカテゴリーでもって名づけることになるのだと言うのです。それで、下層集団はこういったことを引き合いに出しながら、ヒエラルキーを登ってゆこうと決心するのですが、人々はここではこうした集団に固有の方法として「人種」の概念を使うことになるでしょう。こうなると、私からすれば、私たちが古典的な反ユダヤ主義について話しているように思われます。反ユダヤ主義者とはどのような人々だったのでしょうか。人々を抑圧する『ヴェニスの証人』のシャイロックのような抜け目のない人々が頭に浮かぶでしょう。多くの人々は彼らに敵対し、そして反ユダヤ主義を生み出すのです。

B: ええ、その通りです。しかし、反ユダヤ主義はそれ以上の何かであり、それは敵や競争相手を抑圧したり、あるいは排除したりさえするというようなこと——ここではありとあらゆるふさわしい括弧や引用符がつけられるのかもしれませんが——です。人種主義のさまざまなかたちを分類し、整理するために、多くの二分法や区別が提案されるのだと思います。それがあまりに複雑になりすぎると、イマニュエルが強調する一般的な力や傾向が部分的に忘れられてしまいがちです。他方では、無視することのできない別の力や傾向もまた存在するのであり、というのも、それらは人種主義が今日の世界で果たす政治的な機能に関して、私たちが人種主義の機能を理解したり記述したりする際の根拠でもあるからです。イマニュエルは人種主義の経済的な機能をより直接的に強調し、したがって「階級」との接合を強調するでしょう。

そして私は人種と「国民」の接合をより強調したいのです。それゆえ、人種主義、外国人嫌い、そしてナショナル・アイデンティティを同質的なカテゴリーと理解することが互いに結びつくのであれば、「人種」の定義において文化的要素を考慮に入れることが必要になってきます。たとえナ

チス・ドイツを、すべてを理解するためのパラダイムとはしないとしても——（アドルノやホルクハイマー、そしてそれ以外の人々といった）戦後の言説ではこれをパラダイムとする傾向があり、また理解できることでもあるのですが——、さらに一般的に絶滅あるいは排除へとつながったある種の人種主義のかたちを考慮に入れる必要があります。また、搾取やヒエラルキーの構造と形態をできるかぎり安定させ、変えずにとどめておく別の人種主義のかたちも考慮する必要があります。もちろんこういったあらゆる人種主義の形態は互いに重なり合うところが多々あります。それはアーレントが私たちに教えてくれたことです。19世紀や20世紀のアフリカのコンゴやそれと同様の場所における植民地化の実態を見れば、搾取だけではなく、絶滅や極限的な状況もまたあったことが分かるでしょう。たしかにグレー・ゾーンはあるのですが、しかし互いに大きく異なる要素もまたあるのです。私は同じカテゴリーでもって反ユダヤ主義を完全に説明したり、記述したりすることができるとは思いません。

今日イスラム恐怖症がフランスとヨーロッパで広がっており、さらには今やアメリカでも広まりつつあります。けれども、イスラム恐怖症はつねにあったのであって、ただ中心的な問題ではなかっただけなのですが、現在までに9.11やそれ以外の出来事があり、またトランプや彼と同様の人々がイデオロギー的にイスラム恐怖症を必要とするために、これが中心的な問題となりつつあるのです。しかし、イスラム恐怖症はヨーロッパではこれまで2、3世紀にわたって中心的な問題であり、なぜならもちろんトルコ、北アフリカ、サハラ砂漠以南アフリカなどからの移民人口が増加したからです。これに別の文化的な要因も加わり、イスラム恐怖症は反人種主義にとって中心的な問題です。そして反人種主義はフランスでは非常に難しい状況にあります。この点についてはフランスはひどい国であり、この国の世俗主義のあり方がその理由でもありますし、また北アフリカにおける過去の植民地化を批判的に振り返ることを受けつけないという理由もまたあります。こういったことすべてが積み重なった結果、憎悪に満ちたイスラム恐怖症へとつながったのであり、イスラム恐怖症を主張する者たちは自らを誇るばかりで、自分たちの人種主義的な性質を認めようとはしません。

BJ: 『人種・国民・階級』での分析をめぐっておふたりが続けてこられた研究について、やり残された点、あるいは欠けていたがゆえに再度やり直そうとした点とはどのようなもののでしょうか。別の核となる概念を付け加

えることを考えていますでしょうか。

B: そうですね、この著作になかったのは宗教です。当時の私たちはふたりとも宗教が重要だとは考えなかったのであり、少なくともはっきりとそのようには考えていませんでした。

W: パリのオプティ大司教は『ル・モンド』掲載のインタビューで、宗教という言葉は新たなタブーであるとはっきりと述べています。神について話すことは避けるべき何事かであるとみなされるということです。そして、近頃オプティ大司教が多数のイスラム教徒を含んだ聴衆に語りかけた際に、聴衆は彼に喝采を送ったのですが、というのも聴衆は彼に「少なくともあなたは神について話す」からだと語ったというのです。

B: ええ、そうでした、そうでした。そうすると、タブーである言葉とは何なのでしょう。

W: 私が関心を寄せるのは、フランシスコ教皇が演説のなかで——もちろん私は彼が神について語らないなどとは言いません——難民と移民について語っていることです。そういうわけで、これはカトリック教会の別のブランドとなったのです。

BJ: 東ヨーロッパではそれほどうまくいっているとは思えません。

B: ええ、あまりうまくいっていません。しかし、さらに興味深いのは、オプティ大司教の前任者たちが東ヨーロッパ出身であることで、そのことは教会の政治的な役割に変化をもたらしました。

BJ: そうすると、宗教に関連のある問題がひとつはありますね。

B: 宗教について話したい人がいるとは思えませんが。

5. よみがえるナショナリズム

BJ: 全世界に広がるニュー・ライトと権威主義体制の隆盛は、きわめて多様な右派的な宗教運動と結びついています。インド、ロシア、トルコ、さ

らにアメリカのみならず、ポーランド、クロアチア、セルビアといったより小さな国を思い出しても、人種主義的な右派勢力、右派ナショナリスト運動、そしてナショナリストのレトリックを手にした権威主義的な支配体制のあいだで、不可思議な結びつきや同盟があるように思われます。ナショナリズムへの後退、そしてきわめて強力な右派のレトリックの影響を受けた宗教的な狂信への後退を前にして、現在の状況をどのように理解していますか。こうした事態はどのように進んでゆくのでしょうか。

B: その点については、ほんの一言だけ述べましょう。私の頭を悩ます何がたしかにあるのですが、それについて私は答えを持っているわけではありません。宗教が今日ではより目につきやすくなっていると主張したり、あるいはそのように観察したりするとき、そしておそらくは客観的に見ても宗教が政治的な変化や衝突においてより大きな役割を担いつつあるのですが、こういったことはヨーロッパだけに限られたことではありません。インドが深刻な例です。そしてつまるところ東ヨーロッパ地域でも、それほど昔にさかのぼらずとも宗教は決定的な役割を果たしたのであり、また今もそうした役割を果たしています。恐るべき事態です。

BJ: そのうえ宗教は制度に根を下ろしています。

B: ですから、歴史家や哲学者といった私たちと同じく開かれた人々にしてみれば、こうしたことは一種の退行のように見えるかもしれません。あらゆる類いの衝突が経済的な利益、教育、政治的なイデオロギーに基づいて起こる世界となる代わりに、私たちはふたたび宗教的な憎しみに覆われつつあり、しかもこうした憎しみに劇的に囚われつつあるのですが、そういったことは一見すると何か過去のことのように見えます。しかし、これは過去のことでないものであり、むしろ将来有望な過去のようなものなのです。どうしてこうなったのでしょうか。私がすでに述べた論理にしたがえば、そしてそれは私たちの著書の理屈でもあると思うのですが、おそらくさまざまなカテゴリーは柔軟であり、自ら変化すると私たちは言いたかったのだと思います。そして私はこの論理にしたがって、実はこれこそがナショナリズムの新たなブランドなのだと言いたい誘惑に時おり駆られます。そう言いたければ、これは新しい部類です。それは新しい言説のようであり、実際にはナショナリストのレトリックを隠す言説です。この宗教的な言説はあまりにしばしばナショナリストの手によって使われます。それは集団を生み出し、排除して純化したり、外国人を排除したりするた

めに用いられるのであり、そうした外国人が宗教上の敵としてスケープゴートや標的となりつつあります。パキスタンのキリスト教徒や、ヨーロッパのイスラム教徒といった人々のことです。

ですから、これはナショナリズムの論理なのです。しかし、私はまた自分の知的な歩みにたいしてより批判的にもなっており、もちろんそれは私がおそらく今日のポスト・コロニアルな言説やポスト・モダンな言説に幾分かの影響を受けているからです。だいたい前にフランスのジャーナリストであるジャン・ビルンボームが1冊の本を公刊し、それなりの成功をおさめたのですが、そのなかでビルンボームは左派が宗教について知ろうとも耳を傾けようともしないと述べました——宗教は左派にとってタブーだということです¹²。左派は宗教が歴史のなかでどれほど強力な要因であるかを理解せず、そして手短かに要約するならば、実は史的唯物論と経済的決定論が左派を盲目にしているからだなどと述べました。それで、私はこうした言葉をまともに受け取ろうとは思わないのですが、宗教がナショナリズムにとっての隠れ蓑だということにも確信が持てません。これは私にとって大きな、大きな問題なのです。

BJ: ですが、あなたたちの共著『人種・国民・階級』がある程度は世俗主義や世俗化に貢献する——人種主義やナショナリズム、さらに階級関係においても、これらを宗教から分離して理解することに貢献する——と主張することもできますね。

B: 次のセミナーのテーマだね。

BJ: いいですね、そうしましょう。最後の質問をさせてください。人種主義を乗り越えることはできるとお考えですか。

6. 人種主義を乗り越える？

W: 資本主義システムは構造上の危機に陥っており、資本主義はこの危機から抜け出し、極端な人種主義システムであるような新たなヒエラルキーのシステムとなるか、あるいは——これは歴史上いまだ一度も存在しなかったことですが——相対的に平等なシステムとなるでしょう。ですから、私たちが人種主義を超えてゆくことはありうるのですが、それを予測する

¹² Jean Birnbaum, *Un Silence religieux. La gauche face au djihadisme*, Seuil, Paris, 2016.

ことはできないのです。ですから、今から 40 年後に私に同じ質問を尋ねてくれればよいのですが。それまでには人種主義を乗り越えられるか、あるいは乗り越えられないかのいずれかとなるでしょう。というのも、私たちはその分かれ道のいずれかにいるでしょうから。より悪いかよりよいかのいずれかとなるでしょう。そしてあなたが今、長い説明を望むのでなければ、ここでやめておいたほうがいいでしょう。ですが、「はたして人種主義を克服することができるのだろうか」というあなたの質問にたいする私の答えは、「おそらく」というものだと思います。

B: 時おり私は、未来は悪くなるかよくなるかのいずれかだろうというイマニュエルの予言をからかうことがあり、というのも私が言うのは、それがほとんどトートロジーと変わらないからだということでした。しかし、実を言うと、私はイマニュエルの分かれ道というアイデアを大変気に入っています。私は分かれ道が未来にあるのではなく、今こそ分かれ道にあると信じる傾向があるという留保はつけなければなりません。

W: その通りです。私たちはしばらくのあいだ分かれ道にあるのです。

B: イマニュエルは目前の政治的目標あるいは中期的な政治的目標と考える政治問題を列挙しています。こうした目標は左派にとってきわめて重要ですが、それと同時にこの目標によって、グローバルな左派に相当する何か積極的な要素を打ち出したり、また自らが積極的な要素となったりすることもできるかもしれませんし、したがって世界がより良い道を進むのか、もう一方のより悪い道を進むのかという点について、歴史的な趨勢を担いうるかもかもしれません¹³。話を単純化してしまいましたが、これはいずれを選ぶかを前にしたジレンマなのです。反人種主義を擁護すること、そして反難民、反移民、外国人嫌いなどあらゆるかたちの人種主義を批判すること、これらすべてが関係してきます。私がここで最後に言いたいのは、未来を予想することはできず、また未来は不可避でもないということです。もし私たちがポスト資本主義のようなものを信じるのなら、それは最悪の場合には今よりさらに不平等で抑圧的なシステムですが、もしポスト資本主義によって、人種による差別、憎悪、暴力を主たる特徴とするさまざまなかたちの史的資本主義システムが取って代わられるのかもしれ

¹³ 以下を参照。I. Wallerstein, *La Gauche globale*, op. cit.

ないとしたら、このこと〔未来は開かれており、私たちが分かれ道にいること〕はなおさら差し迫ったことなのです。

イマニュエルにしてみると、そしてこれはおおそレヴィ＝ストロースの立場と重なるのですが、人間の多様性は人間にとってつねに問題となります。人間の多様性は私たちがみな同じではないということの意味しており、そしてこうした多様性は不変なのではなく、それは民族的な多様性であり、言語的な多様性でもあり、おそらくは広い意味で宗教的な多様性でもあり、またセクシュアリティの差異もあって、そしてこれらはけっしてなくなることがないということの意味をしています。それが問題なのです。私たちは多様性をどのように扱うべきでしょうか。平等や自由といった普遍的な原理をただ引き合いに出すだけでは問題を解決することはできません。人間の多様性がヒエラルキーを打ち立てて人種的な抑圧を生み出すための道具となることが避けられないということはありません。しかし、私の見たところでは——私は共産主義の古典的な思想がこの点を知ろうとしなかったとは言いませんが——人間の多様性は問題であり続けるでしょう。おそらく問題は多様性がつねに何らかの仕方でも衝突をもたらすものであり続けるのかどうかです。

W: ええ、そして衝突はまた避けられないというわけではありません。将来も変わらずに次のようなことは続くかもしれませんが。つまり、10通りの異なるカテゴリー化の方法があれば、私たちはそのうちのひとつを選んで人々をカテゴリー化し、カテゴリーを名づけるのであり、そしてあなたはあの集団に属しているとか、あなたはこの集団に属しているなどと言うでしょう。それから、ある集団はより優れていて、また別の集団はより劣っているといったように、集団と集団との関係についても語るようになり、そしてあなたは人種主義的になってしまうのです。

B: まったくその通りですが、私たちの共著でも他の人々にとっても重要なのは、ヒエラルキー、差別、抑圧とともにあるそうしたカテゴリー化を、人々の意識を変えるだけでは容易には乗り越えることができないということです。それらは客観的な条件であるからです。

BJ: 衝突に先立って多様性があるということをおっしゃっているように思えますが、それとも反対に、多様性に先立って衝突があるということ

しょうか。

W：多様性は単なる最近のレトリックにすぎず、経済システムの内部に人種主義のカテゴリーがあるという現実を認めているだけです。私たちは経済システムと折り合いをつけながら「いや、多様性はよいことだ」と言います。そしてそのことは、ある集団のより広い社会にたいする状況を改善するために集団をさまざまな仕方で助けるなどして何ごとかをしなければならないということを意味します。しかし、それは何かをすることで状況を改善するという改良主義のレトリックであり、人種主義がなくなるわけではありません。

BJ：お話を伺いする時間を割いてくださり、本当にありがとうございます。光栄でした。

B：ありがとうございます。私たちふたりが共同の仕事についてこれほど長く、また詳細に語り合ったことはなかったと思います。どれほどの時が流れたのかに気づくのは恐ろしいことですが、共同の仕事が何ごとかを残し、友情、問題、そしてあなたのような人々との関係をもたらしたことが分かったのは楽しいことです。

W：会を開いてくれてありがとうございます。

訳者解題

訳出したのは、フランスの哲学者エティエンヌ・バリバル (1942-) とアメリカの社会学者イマニュエル・ウォーラーステイン (1930-2019) が人種主義 (racism) をめぐって交わした対話である。

出典は以下の通りである。“Is there an option to go beyond racism?” Étienne Balibar and Immanuel Wallerstein in Conversation with Manuela Bojadžijev, in Manuela Bojadžijev and Katrin Klingan (ed.), *Balibar/Wallerstein's Race, Nation, Class. Rereading a Dialogue for Our Times*, Argument Verlag/Haus der Kulturen der Welt, Hambourg, 2018, pp. 240-257¹⁴。

対話は 2018 年 1 月 15 日にパリ人間科学館で行われた。対話の背景となる両者の共著『人種・国民・階級——曖昧なアイデンティティ』の初版刊行は 1988 年に遡る。対話は両者がこの著作を振り返り、またその後 30 年間のそれぞれの仕事を踏まえつつ、現代の人種主義の高まりをめぐって議論を交わすというかたちをとっている。

ウォーラーステインはこの対話の後、2019 年 8 月 31 日に惜しまれながら 88 歳で逝去した¹⁵。対話は結果として、ウォーラーステインの最晩年の思想を伝える資料のひとつとなり、また現時点で確認できるバリバルとの最後の対話の記録となった。ウォーラーステイン亡き今、あらためて対話を読み直すと、おそらくは最後の機会となるかもしれないのを予期していたように思われるバリバルが、ウォーラーステインに向けて口にした「友情」という言葉がいっそう痛切に響く。

時にユーモアも交えつつ過去の足跡を振り返る両者のやりとりからは、ふたりのあいだで結ばれた親密な関係が随所に感じられる一方で、人種主義をいかに理解するか、いかにして人種主義と対峙するかという具体的な内容に入るにつれて、両者は時に鋭く対立する。しかし、30 年の時を経

¹⁴ 『人種・国民・階級——曖昧なアイデンティティ』は 2018 年にフランスで増補版が刊行され、バリバル自身の手による対話の仏訳が「2018 年版序文」として新たに収録されているが、バリバルの発言部分に一部手が増えられている。そこで訳出に際しては英語版を基本とし、バリバルの発言部分については、母語がフランス語であるという点を考慮し、仏語版のニュアンスや表現を参考にした。Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein, « Race, classe, nation : Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein en conversation avec Manuel Bojadžijev » dans *Race nation, classe: les identités ambiguës*, Paris, La Découverte, 2018, pp. 11-52.

¹⁵ Christophe Aguiton, « Immanuel Wallerstein, une figure de l'altermondialiste », *Libération*, le 5 septembre 2019; Étienne Balibar, « Immanuel Wallerstein: le système et l'histoire », *Libération*, le 10 septembre 2019; Robert Boyer, « La mort du sociologue Immanuel Wallerstein », *Le Monde*, le 9 septembre 2019; Romain Huret, « Immanuel Wallerstein, un intellectuel global », *Libération*, le 5 septembre 2019; 川北稔「世界システム論 壮大な試み——ウォーラーステインさんを悼む」『朝日新聞』2019 年 9 月 13 日。

で言葉を交わすふたりのあいだで、あらためて浮かび上がる意見の対立は、必ずしも議論が平行線をたどって終わったことを意味するわけではない。というのも、両者の対立は、両者が人種主義をそれぞれ異なる観点から概念化していることを意味するからである。そして、対談を読む読者は、時に重なり、また時に分かれるバリバルとウォーラステインそれぞれの主張を追うことによって、多面的な人種主義の姿をつかむように導かれる。このように、両者のアプローチの相違を通じて浮かび上がる人種主義の多面性の解明が本対話の魅力となっている。

共著の刊行からすでに30年の時が経っているために、両者が前提としていた当時の状況と今日の状況のあいだに大きな隔たりがあるのは否めない。当時、東西冷戦体制の崩壊前夜にあつて、両者はマルクス主義に足場を置きながら、西側の自由主義世界が内包する人種主義の問題を考察の中心に置いていた。それゆえ『人種・国民・階級』は一方ではたしかに冷戦末期の著作である。しかし、他方では両者の議論はいささかも古びていないばかりか、むしろ今日の世界においてより現代性をもちつつあるように思われる。

それは両者が分析していた人種主義の問題が、いわゆる先進国と呼ばれる国においても、より目につきやすいかたちで現れているからである。冷戦後の世界は自由主義の勝利による「歴史の終わり」といった幸福なヴィジョンに収斂することなく、新自由主義の全世界的な広まりを背景として、階級格差の拡大、既存政党の支持率低下、排外主義的なポピュリズム政党の台頭といった複数の要因が重なり、人々を分断する人種主義の問題が緊喫の課題として浮上してきた。その意味では『人種・国民・階級』はすでに30年前から、今日先鋭化する人種主義の問題を先取りして提示していたと言えよう。対話の聞き手役を務め、さらにこの対話を収めた上述の論集 *Balibar/Wallerstein's Race, Nation, Class. Rereading a Dialogue for Our Times* を編集したマニュエラ・ボヤディエフ（ドイツ・リューネブルグ大学教授）の狙いはこのような現代性を明らかにすることにあつたと考えられるが、訳者ふたりもまたこのような狙いを共にするものであることを記しておきたい。

バリバルとウォーラステインの両者もまた、自らのアプローチがもつ現代的な射程については十分に意識している。対話では人種主義の主題に関連して、人種 (race)、国民 (nation)、階級 (class) という中心的な三つの概念が考察されると同時に、ジェンダーの問題系との関わり、ドナルド・トランプ政権のアメリカ、世界的なナショナリズムと宗教の復活、イ

スラム恐怖症の浸透、多様性(ダイバーシティ)の流行など様々な現代的課題が言及される。具体的な分析については両者の対話を読んでいただくこととして、以下では、対話を読む際の補助線として、『人種・国民・階級』と本対話の連続性という点を中心に紹介する。まず、バリバルとウォーラーステイン両者の共通点を示したのち、続いてバリバルとウォーラーステインそれぞれのアプローチを概観する。

1. 共通の地平

1985年から87年にかけてパリ人間科学館で開催したセミナー、そして『人種・国民・階級』の執筆の経緯を振り返るバリバルとウォーラーステインの語りを通じてまず明らかになるのは、『人種・国民・階級』がポストコロニアル時代の著作であるという点である。

植民地が独立を果たし、主権国家の地位を獲得する一方で、かつての宗主国内に旧植民地出身者を含む多様な住民層が混在する状況を仮にポストコロニアル状況と名づけるならば、アルジェリア戦争(1954-62)期を経た1980年代のフランスはこの名にふさわしい状況下にあった。バリバルは移民労働者、さらには移民第二世代にたいする人種差別の問題に直面するなかで、当時すでに『近代世界システム』1巻(1974)を著していたウォーラーステインの「世界システム論」を発見することになる。

労働者階級は宗主国出身者層だけで形成されるのではなく、むしろ旧植民地出身者を含む多様な層から成るという労働者階級の雑種性は、当時のバリバルの関心事であったが、最初期の研究で独立後のアフリカをフィールドとしていたウォーラーステインにとっては、むしろ自明のことであったかもしれない。いずれにせよ、インドで開催された学会での出会いをきっかけとして、両者は19世紀ヨーロッパ由来のマルクス主義のプロレタリアート概念に批判的な視点を確保しつつ、労働者階級の雑種性を例外的な事態ではなく、むしろ常態として分析することになる。このように、両者を接近させるきっかけとなったのは、労働者階級の雑種性と移民労働者への人種差別という現実的な課題であった。

バリバルとウォーラーステインが『人種・国民・階級』で選択したのは、人種、国民、階級という民衆の三様のアイデンティティを「曖昧なアイデンティティ」として捉えることである。この点については、対話のなかで共著の副題として「両義的なアイデンティティ(ambivalent identities)」ではなく、「曖昧なアイデンティティ(ambiguous identities)」を選んだ経緯を語る過程で触れられている。微妙なニュアンスの違いではあるが、「両義

的」とすれば、ひとつのアイデンティティが正反対のふたつの性質を有するというニュアンスになると考えたという。それにたいして「曖昧な」とすると、ひとつのアイデンティティと別のアイデンティティを分かつ境界線自体に揺らぎがあるという点に光が当たることになる。

アイデンティティを交雑したものとして捉えるというこの視座は、人種、国民、階級という各アイデンティティが相互に浸透し合う事態を検討するのに適していた。バリバールにおいては、フランス人労働者による移民労働者への人種差別に見出されるような階級と人種のアイデンティティのあいだの接点に光が当たることになる。また、ウォーラーステインにおいては、第三世界で宗主国から植民地が独立する際にナショナリズムが発揮する力に見出される、国民と階級のあいだの接点がより明確となることになる。

こうして採用された両者の「インター・セクショナル」な手法は、ジェラルド・ノワリエル、ジャン＝ルー・アムセル、エマニュエル・テレイ、サミール・アミン、エリック・ホブズボーム、アーネスト・ゲルナーなど、英語圏と仏語圏双方から多分野の専門家が集まった学際的なセミナーの議論を反映したものであつたであろう。フランスの哲学者とアメリカの社会学者のふたりが進める共同研究に、多様な研究者が3年間にわたって集うという特異な場であったという点もまた、今日の研究の状況を先取りする取り組みであった。また、とりわけウォーラーステインにおいては、人種、国民、階級にジェンダーというアイデンティティが加えられることで、より多層的な考察が深められることになった。

2. ウォーラーステインのアプローチ

アイデンティティの観点を重視するウォーラーステインとバリバールの視点は、一方では人種主義を個人や集団の意識や主観といった観点から理解する立場と接近する。事実、人種差別が現れる具体的な場面に立ち戻れば、人種差別はある個人が別の個人に向ける嫌悪や憎悪といった感情や、ある集団が別の集団に抱く優越感、あるいはその裏返しとして、自らの優越性が脅かされることの恐怖感としばしば結びつく。まさに意識や主観に触れる切実なものであるからこそ、人種差別は執拗なものとなりうる。

これにたいして、ウォーラーステインが本対話で「ヒエラルキー化」という表現を用いて主張するのは、人種主義が客観的な条件に根差しているという点である。人種主義は個人や集団の意識や主観と結びつくだけではなく、巨視的な視点に立てば、垂直的なヒエラルキーを形成する「資本主

義世界システム」の内部に位置づけられるという点が強調される。

ウォーラーステインによれば、「資本主義世界システム」は16世紀に生まれ、「中核／半周辺／周辺」というかたちで階層化されるが、そのなかで人種主義は、高賃金の労働者集団と低賃金の労働者集団を分かち、労働者の序列化を正当化するイデオロギーの役割を果たす。それゆえ、絶えざる資本蓄積のメカニズムをビルトインされた「資本主義世界システム」にとって、人種主義は機能的に働くというのがウォーラーステインの立場である。

以上のようなウォーラーステインの人種主義論をめぐっては様々な評価があるが、ここでは詳細には立ち入らずに、対話を通して浮かび上がるその特質を二点だけ指摘したい。ひとつは、人種、国民、階級という三様のアイデンティティのなかで、「人種」と「階級」の結びつきが特に重視されるという点である。ウォーラーステインは人種主義の経済的な機能性を重視するために、「資本家階級」と「労働者階級」、「頭脳労働者」と「肉体労働者」、あるいはより現代的な術語を用いるならば「正規労働者」と「非正規労働者」といった経済におけるヒエラルキーと「優れた人種」と「劣った人種」といった人種におけるヒエラルキーが基本的には重なることになる。

それゆえ、植民地支配や奴隷制に代表される人種間に明確な差を作り出し、その差から経済的な利益を引き出す人種主義を説明するのには適している。一例を挙げれば、白人と黒人のあいだの社会階層の違いと人種的なヒエラルキーが一致する傾向にある南北戦争後のアメリカはこのような説明に合致する。

他方で、人種主義を「資本主義世界システム」のヒエラルキー化のメカニズムに還元しすぎるあまり、人種主義の問題の固有性が失われるという危険もまたある。人種主義はウォーラーステインの説明の体系性に内在する強みと弱みが背中合わせの関係にあることを示すのであり、この点については対話の「4. 人種の対立、階級の対立」でバリバルとボヤディエフが指摘している。

3. バリバルのアプローチ

バリバルが対話のなかで自ら認めるように、バリバルはウォーラーステインの「資本主義世界システム」概念に多くを負う。資本主義は純粋に経済的なものとして捉えられず、むしろ主権国家間の関係が中心となって形成するインター・ステイトな政治構造と一体化している以上、それは

つねに政治と経済の両面から把握する必要がある。バリバルがウォーラー・ステインと共有するのは、資本主義に関するこのような基本的な理解である。

そのような前提を踏まえたとて、バリバルの人種主義に対するアプローチに立ち戻るならば、ウォーラー・ステインのアプローチとの違いとして、二点指摘することができる。ひとつは「人種」と「国民」の関係に着目する点である。バリバルは主権国家の内部に焦点を合わせ、人種主義が外国人嫌悪や移民の排除といったかたちで現れる点を重視する。人種主義は異質な集団を遠ざけ、同質的な国民を作り上げようとするナショナリズムの運動と結びつく。人種主義は純粋な人種というモデルとして国民の前に現れることで、同質的な国民形成の過程を支える役割を担うとされるのである。

もうひとつは「人種なき人種主義 (racism without race)」とバリバルが呼ぶ人種主義の理解である。この概念が表すのは、第二次世界大戦後、ナチズムの反省がヨーロッパの公共的正義となった結果、人種間の明確な優劣を標榜する人種主義は表立ってはもはや標榜しにくくなる一方で、人種差別がなくなったわけではないという状況である。バリバルはピエール＝アンドレ・タギエフの仕事に示唆を受けつつ、この「新しい人種主義」では「文化」が「人種」に取って代わりつつあるという変化に着目する。今日では人種主義は、異質な文化をもち、同化不可能と見なされた集団との住み分けを正当化するものとして働くという見立てである。このようなバリバルのアプローチは、国内で移民二世が選挙権を制限されたり、労働市場で不利な地位に置かれるというポストコロニアルな人種主義を理解する際に意義をもつと考えられる。

付記——対話、シンポジウム、映像作品、翻訳

今回訳出した原文の元になったのは、2018年3月15日から17日、ベルリンの「世界文化の家」¹⁶で開催されたシンポジウム「危険な状況——バリバル／ウォーラー・ステイン『人種・国民・階級』を再考する」(Dangerous Conjectures. Resituating Balibar/Wallerstein's "Race, Nation, Class")を記念して、1月15日にパリの人間科学館で行われた対話である。

¹⁶ ドイツから世界の現代文化と学問を発信することを目的として1989年に設立された機関。

ボヤディエフとキュレーターのカトリン・クリンガンは、『人種・国民・階級』にインスピレーションを受け、同書が世界各地でいかに受容され、翻訳され、影響を及ぼしたかを調査し、世界における人種、国民、階級の現代的問題を考察する共同プロジェクトを実施した¹⁷。このプロジェクトの成果が、上記のボヤディエフとクリンガンの編著である。日本における受容については、三島憲一氏（大阪大学名誉教授）から依頼を受けて、訳者のひとりである中山が執筆した¹⁸。

ベルリンでの国際シンポジウムは、プロジェクトの集大成として、バリバルをメインゲストとして開催され、世界各国から多くの研究者が集まり、議論に参加した。ウォーラーステインは体調不良を理由に参加しなかった。

本邦訳のインタビューはチャールズ・ヘラー、ロレンツィオ・ペッツォーニ両監督の手による映像作品「交差する視線」(Intersecting Optics: a dialogue on “Race, Nation, Class” 30 years on, 2018)¹⁹にまとめられ、シンポジウム会場で上映された。中山がこれを現地で視聴し、字幕をつけて非営利で上映する契約を「世界文化の家」と結んだ。2018年10月28日に東京外国語大学開催の社会思想史学会第43回大会では、もうひとりの訳者である太田が世話人を務めたセッションで日本語字幕版²⁰を上映し、酒井隆史氏（大阪府立大学教授）と佐藤嘉幸氏（筑波大学教授）を招聘して議論を行った²¹。

本邦訳に際してはあらためて「世界文化の家」の了承を得た。末尾になるが、翻訳の掲載を快諾してくださった「世界文化の家」には心よりの感謝を申し上げたい。

Keywords: バリバル ウォーラーステイン 人種主義 ナショナリズム 世界システム

¹⁷ フランス、パレスチナ、ロシア、南アフリカ、アルゼンチン、イスラエル、ギリシャ、韓国、アメリカ、日本、イタリア、インド、イギリス、ドイツ、旧ユーゴスラヴィアなどが調査の対象となっている。

¹⁸ Chikako Nakayama, “Belated Acceptance of Problems: The Meaning of Race, Nation, Class in Japan”, in Manuela Bojadžijev and Katrin Klingan, *Balibar/Wallerstein's Race, Nation, Class. Rereading a Dialogue for Our Times*, pp. 151-161.

¹⁹ 以下のサイトで視聴できる。https://www.youtube.com/watch?v=EhPIDgHewAo

²⁰ 中山とともに東京外国語大学のゼミに在籍していた長谷川健司氏（東京外国語大学大学院博士前期課程）、崔址訓氏（フリーランス翻訳者）が字幕を作成し、太田が字幕協力を担った。

²¹ セッションの報告については以下を参照。

<http://shst.jp/wp-content/uploads/2019/03/2019sessionI.pdf>